

インダス・プロジェクト ニュースレター

第4号

2008年7月31日発行

ごあいさつ

いつもインダス・プロジェクトにご支援ご協力賜りまして、誠にありがとうございます。ここに、インダス・プロジェクトのニュースレター第4号をお届けします。ニュースレターは不定期刊行物で、現地報告やシンポジウムなど研究会の報告をメインに、電子媒体でお送りしております。第4号では、この6月に行われた全体会議や国際シンポジウムの報告、言語学やインド学グループの活動報告を掲載しています。

今回は特にビーズ製作について、遠藤仁さんが現地報告を寄稿してくださいました。遠藤さんはエジプトやシリアでも発掘を経験されておられる若手のホープです。こうした若手による現地報告の発表の場としても、このニュースレターを活用していただきたいと思っております。また、上杉さんが「インダスの土器」という連載をはじめましたが、連載ものも歓迎いたします。小磯さんの連載なども現在計画中です。

本年度末には中間報告があり、また評価委員会にかかります。その中間報告に向けて、年報の刊行も予定しています。文系を主体とする研究の成果は何がなくとも出版物です。皆様からのご寄稿をお待ちしております。

プロジェクトリーダー
長田俊樹

グジャラート州カーンバートのビーズ製作工房

遠藤 仁

2007年末から2008年初頭にかけてカーンメール(Kanmer)遺跡の発掘調査に参加した際、余暇を利用して1月18日～20日にかけての3日間、瑪瑙製ビーズの生産で著名なカーンバート(Khambhat)を訪れた(図1)。この町はキャンベイ(Cambay)湾に面し

た人口8万人程度の小規模な町である。調査には、カーンメール遺跡とともに発掘をしているラージャスターン・ヴィディアピート大学の大学院生R.ミーナ(Meena)氏と、ケンブリッジ大学の大学院生C.ランチェロッチィ(Lancelotti)氏が同行した。

J.S.カラクワール(Kharakwal)博士より、当地の職人アンワール・フセイン・イナーヤト・シェイフ(Anwer Hussein Inyat Shaikh)氏を紹介され、彼の世話になった。シェイフ氏は、インド政府が優れた手工業の職人に授与するNational Awardを2003年に受賞しており、彼の父親も1987年に受賞している、優れた職人一族の若き後継者である。彼の自宅に宿泊しながら、3日間ビーズ製作工程を観察した。職人たちとの会話は主にミーナ氏の通訳に頼った。

石材入手

ビーズは主に玉髄・瑪瑙系石材を用いて生産されているが、チャートやフリントの利用も認められる。それらの多くはマハーラーシュトラ(Maharashtra)州のアウランガーバード(Aurangabad)から搬入されているようであるが、紅玉髄の原石の一部はグジャラート州ラタンプル(Ratanpur)からも搬入されている。そ



図1 カーンバートの位置

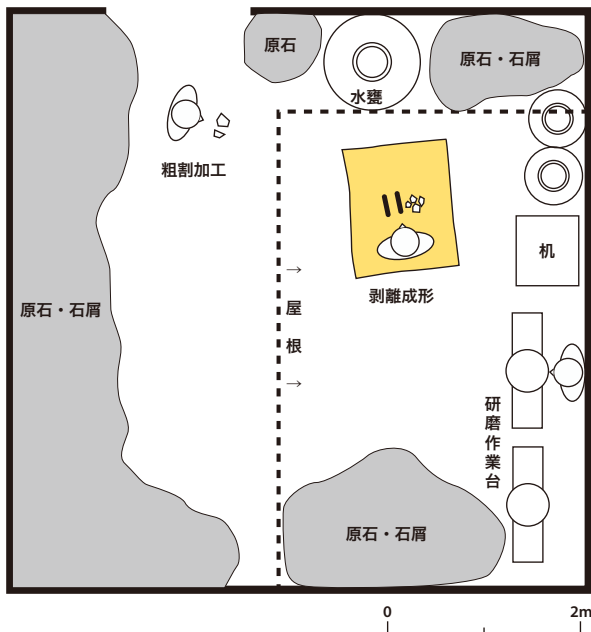


図2 ビーズ製作工房 見取図

他にもグジャラート、マハーラーシュトラ州の各地から様々な色の原石が集められていた。集められた原石は、いずれも原礫面で覆われた未加工の状態では搬入される。それらは人頭大以上(写真1)から拳大(写真2)の大きさまでのもので、各工房のそばにトラックで運ばれ露天に積み上げられ保管されている。

原石のコストは紅玉髄が1kgで20ルピー(1ルピー=2.5円)。他の石材はおおむね1kgを10~20ルピーで購入しているようである。1kgの原石からおおよそ5~10個のビーズ製作が可能とのことだった。

工房

ビーズ製作の工房は、下請けの職人が路上で細々と行っているものも多いが、粗割から研磨までを一カ所で行えるような工房もあった。それらの工房は屋内にあるものもあるが、筆者が集中的に観察した工房は、住宅街の一角の空き地に、一部簡単な屋根をつけただけの屋外施設であった。ただし、研磨に電力を使うため電気は引いてあった。

この工房は図2に示したような配置になっており、敷地内の隅には原石や石屑が相当数集積している。電気は電線から直接引き、大きな水甕も置かれていてすべての作業が工房内でできるようであった。

ビーズ加工(粗割→剥離成形)

入手した石材は、原礫面で覆われた人頭大以上の大きさの大きさに分割される(写真3)。それらはまず鉄製ハンマーで20~30cm角、あるいはさらに小さく分割

することもある。

次にビーズの形になるまで間接打撃による剥離成形を行う。間接打撃には鉄製のピンを用いる。これは長さ約90cmの両端の尖ったもので(写真4)、一方を45度程の角度をつけ20cm程地面に埋め込んで固定して使う。鉄製ピンには、先端が刺突具のように鋭利に尖ったものと、やや丸みを帯びたものの2種類がある。はじめに先端がやや丸いものを用いて大雑把な成形を行い、鋭利な先端のもので最終的に加工する。剥離作業は鉄製ピンにビーズ原石を当て、その原石の反対側を水牛の角製のハンマー(写真5・6)で叩いて行う。剥離の細かい調整は鉄製ピンに原石を当てる角度で行っていた(写真7・8)。インダス文明期のビーズに類似した長さ6~8cm程度の細長いビーズの成形には、1点につきおよそ10分の時間を要していた。

写真9は加工時にできる剥片、写真10は加工途中のビーズである。なお、この工程では粗い成形でビーズ1点につき職人に7ルピーが、最終成形でビーズ1点につき7ルピーが支払われる。

ビーズ加工(研磨)

研磨は電動のグラインダーを用いている(写真11・12)。観察中に停電などがしばしば起こり、その度に作業は中断しており、手動で行う代替手段はないようであった。

研磨は医療用の点滴用器具を流用したもので水を自動的に補給しながら、目の粗いものから細かいものまで3段階に分け行っており、最終段階では工業用の研磨材(粉末状)も用いていた。

写真13が完成品である。なお、この工程ではビーズ1点につき職人に10ルピーが支払われる。

ビーズ加工(加熱処理)

加熱処理は紅玉髄の着色のために行う工程である。研磨まで済んだビーズをこの工程により黄色から紅色に変えるのである。写真13の中央のビーズが加熱処理を行っていないもので、左側のビーズが加熱処理を2回行ったものである。双方は元々同じ原石から作られたものである。

加熱処理には専門の職人がおり、屋外に設けられた長さ120cm、奥行き80cm、高さ50cmの煉瓦製の囲い状施設で行われる(写真14)。内部はビーズを入れる壺が並べられ、一度に大量のビーズが処理される(写真15)。土器の中にはビーズと米の籾殻が、土器の周りには木のチップが充填され、そこに火をつけて表面が



写真1 ビーズ原石



写真2 ビーズ原石



写真3 原石の粗割



写真4 間接打撃用鉄製ピン



写真5 水牛の角製ハンマー



写真6 水牛の角製ハンマー



写真7 ビーズの成形剥離



写真8 ビーズの成形剥離



写真9 剥片



写真10 未製品



写真11 ビーズの研磨



写真12 ビーズの研磨



写真13 完成品



写真14 加熱処理

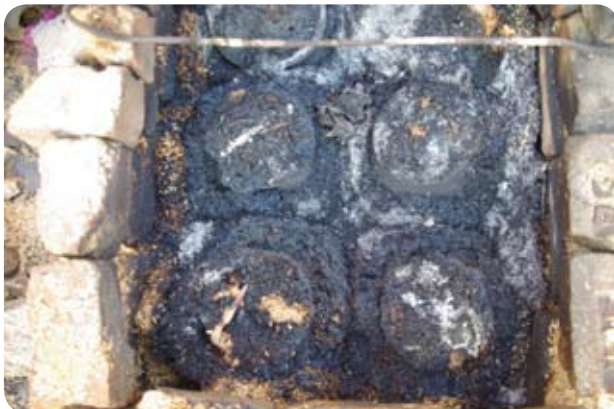


写真15 加熱処理



写真16 ビーズの穿孔



写真 17 ビーズの穿孔



写真 18 穿孔道具



写真 19 商品

燃え広がり、数分で火が燦りはじめる。そして囲い状施設にトタンの覆いをかけ 13～14 時間放置する。その後土器を取り出し、1 時間半ほど冷ましたらビーズを取り出す。これが加熱処理 1 回の工程である。ごく稀に火力が強くて、ビーズが破損することもあるようである。

なお、この工程では加熱処理 1 回(ビーズが約 300 点)につき職人に 100 ルピーが支払われる。

ビーズ加工 (穿孔)

現在、通常は電動ドリルでの穿孔が主流であるが、手で穿孔を行う職人が健在であることを聞き、特に頼ん

で作業を観察させてもらった。穿孔職人は町の中心部から北に 8km 程離れた農村に住んでいた。なお、町に住むビーズ加工職人のほとんどがイスラーム教徒であったが、彼はヒन्दゥ教徒であった。

ビーズの穿孔は研磨や加熱処理の後、すなわち最後の加工として行う。電動ドリルは町の中心部にある工場に依頼して行なっていた。手動の穿孔は電動と比べ、倍の時間を要したが、それでも長さ 3cm 程のビーズなら 1 分強で作業は完了していた。

まず、木製の台座にビーズを固定し、水をためた土器に細い管をつけた装置で水を常時補給しながら弓で一気に錐を回し、穿孔する(写真 16・17)。長いビーズは両端から穿孔を行う。錐の先端は鉄製で、そこに工業製ダイヤモンドがつけられている。直径 1～2mm 程の鉄製のピンの先端に、指とハンマーでダイヤモンドをつける姿は、これぞ職人芸とでもいうべき匠の技であった。

なお、この工程(手作業)では短いビーズで 15 ルピー、長いビーズで 30 ルピーが職人に支払われる。

ビーズ販売

現在インド国内でのビーズの需要は高くなく、あまり売れないとのことであった。そのため職人も減少しており、この産業は衰退しつつあるようである。近年では中国に輸出することも多いようである。

各工程にかかるコストは前記したとおりであるが、最終的にビーズは 135 ルピーで販売されている。

参考文献

Kenoyer, J.M., M. Vidale & K.K. Bhan (1991) Contemporary stone beadmaking in Khambhat, India: patterns of craft specialization and organization of production as reflected in the archaeological record. *World Archaeology* 23(1): 44-63.
Kenoyer, J.M., M. Vidale & K.K. Bhan (1994) "Carnelian Bead Production in Khambhat, India: An Ethnoarchaeological Study". in B. Allchin (ed.) *Living Traditions: Studies in the Ethnoarchaeology of South Asia*. Oxford University Press, New Delhi.

インダスの土器 ハラッパー式土器 (1)

上杉 彰紀 (総合地球環境学研究所)

土器は遺跡から出土する遺物の 90%以上を占めるの

が一般的であって、土器出現以降の時代の遺跡であればその多寡はあっても必ずといってよいほど土器が出土する。これは南アジアに限られたことではなく、世界各地の土器が用いられた地域において普遍的な事実である。この事実ゆえに、考古学研究においては土器がさまざまな役割を果たす。

一つは遺跡に人が住んだのがいつの時代であったのか判断する時間の物差しとしての役割がある。同じ粘土を素材としてつくられた容器であっても、時代によってその内容は異なっている。例えば用いられる器の種類とその数、器の形、つくり方、装飾要素など、時代が変わればこれらの要素において当然のごとく土器は変化する。形は変わらなくとも装飾が変わる場合もあるし、形やつくり方がすっかり変わってしまうこともある。時代によって、その時代につくられ用いられた土器を特徴づける諸要素の総体（これを様式と呼ぶ）は異なってくるので、結果として土器のもつ諸特徴を細かに観察すればそれがいつの時代につくられたものかわかる。その時間幅は100年のこともあるし、それよりも長い場合も短い場合もある。

諸要素の変化によって引き起こされる土器の変化の背景には、その時代の人々がどのような技術をもち、どのような形の土器をつくらうとしたのかというきわめて社会・文化的な志向性が存在している。土器を日常生活の中でどういった目的に使用しようとしたのか（機能的側面）、また土器をどのように文化的な産物として位置づけていたのか（非機能的・観念的側面）、それが結果として土器という造形に表現されていると考えることができる。その意味で、土器はある時代の社会・文化の産物であり、その時代の生活様式や社会・文化的志向性の一端を私たちに伝えてくれる。

ここから土器研究のもう一つの軸を引き出すことができるだろう。それはある特徴の組み合わせによって把握できる土器様式の空間的広がりを見出すことによって、その時代の生活様式や文化的志向性の広がりを理解するということである。土器の空間的变化には隣接する地域間で漸移的に変化していく場合もあれば、隣接する地域間でもまったく異なる土器様式が存在する場合もある。また、土器様式の一部の要素は漸移的变化を示すが、別の要素は断絶的变化を示す場合もある。例えば、日常的に大量消費される雑器であれば地域を越えても変化に乏しいが、装飾を施し丁寧につくられた特別な土器では地域によって著しい変化をみせる場合がある。このように、土器の空間的变化のあり方の違いには土器が有している社会・文化的産物としての意味や、さらにいえば地域社

会間の関係が投影されている。

土器の変化を時間的・空間的に位置づけていくことによって、ある時代のある地域の社会・文化の様態を明らかにすることが土器研究の目的である。特にどの遺跡でも出土するという利点から、きわめて密度の高い比較分析が可能となる。これはほかの遺物では困難な場合もあって、土器が考古学研究の上で果たす役割は大きい。

* * *

前置きが長くなったが、この小文ではインダス文明前後の時代の土器を紹介するのが目的である。この時代に土器がどのように移り変わり、社会の中でどのような位置づけにあったのか、またインダス考古学において土器がどのような役割を果たすのかご紹介していきたい。まずインダス文明期の代表的な土器様式であるハラッパー式土器を取り上げることにするが、今回はハラッパー式土器研究の問題点について瞥見しておくことにしたい。

ハラッパー式土器は1920年代のモヘンジョダロ遺跡とハラッパー遺跡の発掘調査で出土した土器を標準資料としている。その後の研究はとにかくこの2つの遺跡の出土資料を参照することによって進められてきた経緯がある。この研究初期の発掘調査で出土した土器資料はその出土状況がよくわからなかったり、あるいは今日的な意味での土器研究の視点に基づいて時間・空間軸上において明確に定義されたわけでもなかったため、きわめて漠然とした意味でインダス文明の時代の土器として理解されたところが大きい。

インド・パキスタン独立後に各地で発掘調査が行われ、多くの遺跡でハラッパー式土器が出土することになったが、何がハラッパー式土器なのかという明確な定義を欠いていたがために、遺跡間あるいは地域間での資料の比較研究は容易でない状況が生み出されることとなった。ハラッパー式土器といってもさまざまな種類や形、装飾をもった器を包摂している。また近年、アムリー遺跡やナウシャロー遺跡、ハラッパー遺跡などの層位的出土資料の検討をもとに理解が進んできたように、700～800年続いたと考古学者が推定するハラッパー式土器にも時間的な変化があることがわかってきた（代表的な論文としてハラッパー式彩文土器の変遷を取り上げた(Quivron 2000)を挙げておく)。

とすれば、各地で出土するハラッパー式土器にもさまざまな違いが存在する可能性が高いであろう。ハラッパー式土器が出土すればその遺跡がインダス文明圏に含まれることになり、時として文明の展開した範囲が拡大す

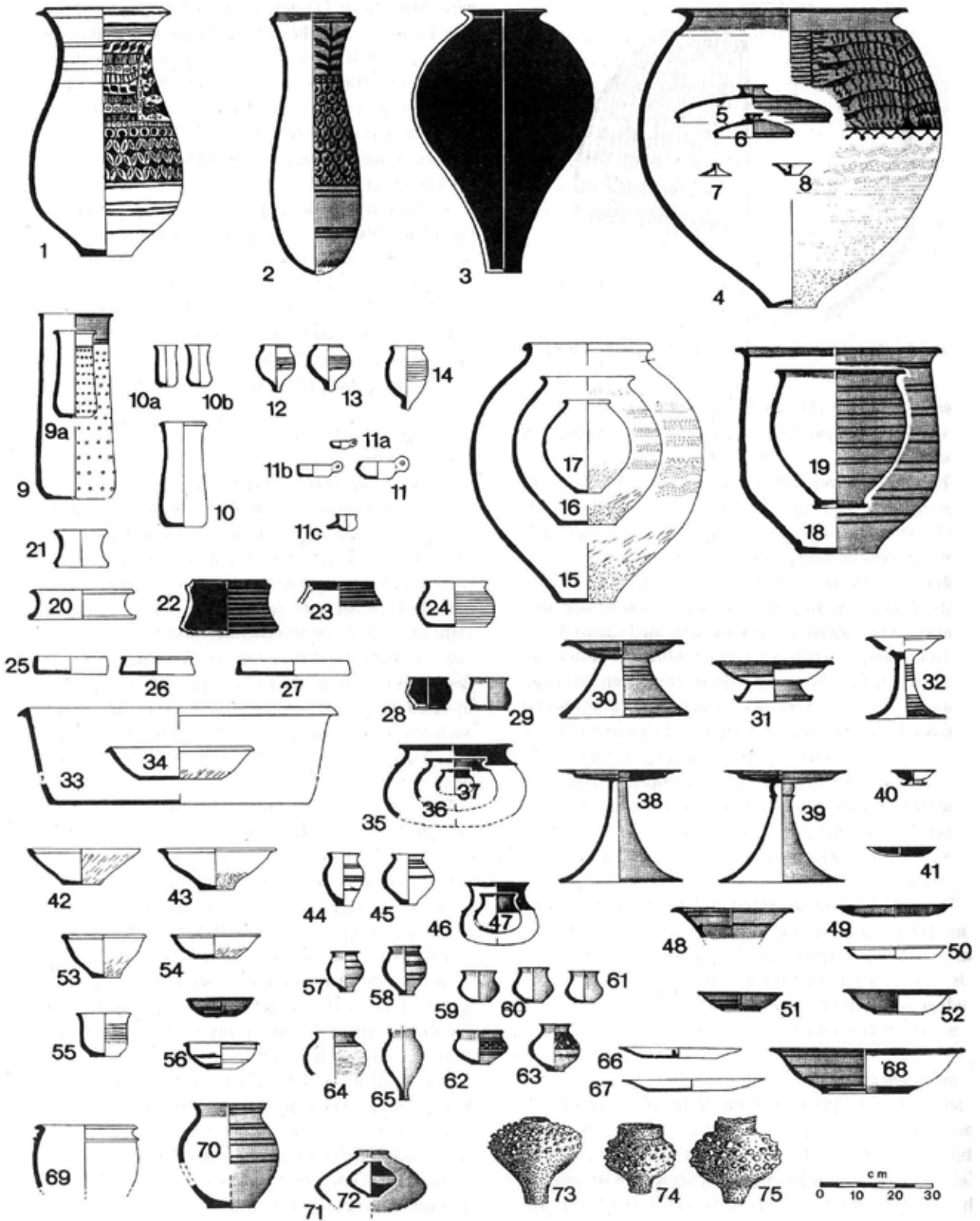


図1 モヘンジョダロ遺跡のハラッパー式土器 (Possehl 2002 より引用。原図は Dales and Kenoyer 1986)

ることにもなるので、ハラッパー式土器の厳密な定義と各遺跡の出土資料の比較分析が重要である。ハラッパー式土器のうちどのどのような種類の器が出土しているのか、それはハラッパー式土器の中でもどの段階に属するものであるのか、また数量的にどの程度出土しているのか、ハラッパー式土器とは異なる土器は出土しているの

かどうか。こうした情報がインダス文明社会の中における各遺跡の位置を理解する助けになることはいうまでもない。

多くの研究者の間では、ハラッパー式土器の厳密な定義は漠然としたままで暗黙の了解となっている部分が多い。その中で1960年代に G.F. Dales が実施したモ

ヘンジョダロ遺跡の発掘で出土した資料の分析 (Dales and Kenoyer 1986) は一般論を越えて個別の資料の分析が行われており、少なくともモヘンジョダロ遺跡で出土するハラッパー式土器がどのような特徴を有しているのか知ることができる。アメリカの調査隊が長年にわたって調査・研究を進めるハラッパー遺跡でも、膨大なデータベースが構築され、出土土器の分析が進められているが (Jenkins 1994, 2000)、全体像は依然よくわからないところが多い。

インド側の遺跡に関しては、多孔土器 (第1図9) のような非常にわかりやすいハラッパー式土器の要素についてはハラッパー式土器としての認識は明確だが、ハラッパー式土器と非ハラッパー式土器の混在が一般的であるグジャラート地方やパンジャブ地方東部では、両者の判別が曖昧に付されている場合が多い。土器の分類体系を確立し、ハラッパー式土器と非ハラッパー式土器の関係を明確にすることがひいてはインダス文明の理解にとって重要となるだろう。

次回はハラッパー式土器の変遷について紹介することにした。

引用・参考文献

Dales, G.F. and J.M. Kenoyer (1986) *Excavations at Mohenjo Daro, Pakistan: the pottery*. The University Museum, University of Pennsylvania, Philadelphia.

Jenkins, P.C. (1994) "Continuity and change in the ceramic sequence at Harappa". in A. Parpola and P. Koskikallio (eds.) *South Asian Archaeology 1993*. Suomalainen Tiedekatemia, Helsinki. pp. 315-328.

Jenkins, P.C. (2000) "The pottery from Cemetery R37: Chronology and the changing social structure of Harappan society". in M. Taddei and G. De Marco (eds.) *South Asian Archaeology 1997*. ISIAO, Rome. pp. 35-53.

Possehl, G.L. (2002) *The Indus Civilization: A contemporary perspective*. Altamira Press, New York.

Quivron, G. (2000) The evolution on the Mature Indus potter style in the light of the excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50(1-4): 147-190.

第2回南アジア考古学会国際大会に参加して

上杉 彰紀 (総合地球環境学研究所)

去る5月25日から5月29日まで、イランの古都シ

ラーズで開催された南アジア考古学会 (Society of South Asian Archaeology) の国際大会に参加する機会を得た。この学会は2006年にインド人研究者を中心にして設立された学会であるが、イラン人研究者もまたその設立当初より関わってきた。今回シラーズで国際大会が開かれたのは、こうしたイラン人研究者の尽力による。

この国際大会は5月25日から27日までの研究発表と、28・29日のシラーズ周辺の遺跡巡検から構成されている。インドからは30名ほどの研究者が参加したが、今回の大会で目を引いたのは何とんでもイラン人の若手研究者の多さである。当初計画されていたプログラムに相当の変更があったため、実際に何本の研究発表が行われたのか正確に把握することはできなかったが、連日夕刻7時を過ぎるまで活発な研究発表が行われたのは、まさにこうしたイラン人研究者の発表によるところが大きい。また、3つに分かれた研究会場はいずれもイラン人の学生によって埋め尽くされて、イランにおいて考古学が著しく発展しつつある状況を目の当たりにすることができた。さらに付言すると、学生の7割前後は女性であった。

その一方でインド・イラン以外の国からの参加者は低調であった。日本からは筆者に加えて宇野隆夫 (国際日本文化研究センター教授)、小茄子川歩 (東海大学大学院生) が参加したが、そのほかの外国人としてはフランス人研究者1名のみであった。

残念ながらイラン人の研究者・学生ともに英語を理解しないか、あるいは不得意で、研究発表の大半はペルシャ語によるものであった。中には発表要旨、発表用のパワーポイントファイルもすべてペルシャ語によるものもあって、発表のテーマすら理解できない例があったことは残念であった。また、本来インドとイランの文化交流を軸にした学会ということで聞いていたものの、インド人研究者の発表にもそうした本来の趣旨から大きく逸脱



写真1 会場



写真2 会場内の様子



写真3 ペルセポリス

して、イラン人の研究者・学生の関心を惹かないものもあつたようだ。このあたりに国際学会運営の難しさがあるのだろう。

それでもイラン人の研究者・学生との交流は、イラン考古学の今後の発展を期待させるに十分であつた。イラン国立考古学研究センターのセンター長であるハッサン・ファゼリ＝ナシュリ氏 (Hassan Fazeli-Nashli) によれば、イラン人研究者と外国人研究者の共同調査が活発に進められており、今後も積極的に外国の調査隊を受けて入れていきたいとのことであつた。そうした中でイラン人の研究水準を高めたいとの狙いがあるようだ。イラン人の若手研究者も、将来的には積極的に英語でその研究成果を発表したいという強い希望を持っており、状況は急速に変わっていくであろう。そうした期待を抱かせるに十分な熱気のコもつた研究発表であつた。

27・28日にはイラン国外からの研究者を中心にシーラーズ周辺の遺跡巡検が実施された。27日には世界遺産として名高いアケメネス朝の都ペルセポリス（ペルシャ語ではタフテ・ジャムシード）と、ナクシュ・イ・ルスタムにあるアケメネス朝諸王の摩崖墓群、アケメネス朝初期の都パサルガードを訪れた。ペルセポリスは世界遺産として整備が進んでおり、我々以外にも多くの外国人観光客が訪れていた。宮殿遺構とその各所を荘厳する浮彫群はさすがに大迫力で、学生のころから写真でしかみることのできなかつた遺跡現地に立つことができたのは、かけがえのない経験であつた。これらの遺跡の見学を通して、あらためてペルシャ文明の奥深さを知るにいたつた。

続く28日にはシーラーズの西にザグロス山脈を抜けたところにあるサーサーン朝の都ビシャプールとシャハプールの浮彫群を訪れた。車中から望むザグロス山脈の光景は壮大で、まさにイラン高原とメソポタミア平原を画する自然の障壁であつた。その一方で、ザグロス山脈



写真4 ペルセポリスの浮彫彫刻



写真5 ナクシュ・イ・ルスタムの摩崖墓群



写真6 シャハプールの浮彫彫刻



写真7 タル・イ・パークーン遺跡



写真8 タル・イ・マリヤーン遺跡

中をつらぬく交通路が存在し、イラン高原とメソポタミア平原の間で頻繁な交流があったのも事実である。最高所を抜けると、谷間にコムギが栽培され、川のほとりではヒツジを放牧する人々の姿を認めることができた。テントを張って放牧する人々もみられたが、より本格的な遊牧民であろうか。只々、自然の壮大さと人々の暮らしに目を奪われるばかりであった。

ビシャプールはザグロス山脈を抜けてメソポタミア平原へと移っていく地形の変化点に位置している。東を望めば険しいザグロス山脈の威容が、西を望めばなだらかな地形が低い山々を抱きながら広がっている。遺跡は石積城壁によって囲まれ、その内部で宮殿遺構やアナヘター女神を祀った神殿遺構などが発掘されている。ビシャプールのすぐそばにあるシャハプールの浮彫群は、サーサーン朝の王侯像と、王権を授けるアフラマズダ神を描いたものである。ペルセポリスでみたアケメネス朝期の浮彫に比較すると、ローマ美術の影響を受けてか、より彫りが深く、写実性が高い表現となっている。前日のアケメネス朝に続いて、この日はサーサーン朝の歴史について遺跡を通して理解を深めることができた。

また、学会が始まる前に、ペルセポリスがあるマルヴダシュト平原に所在する先史時代の遺跡を訪れた。一つ

はかつて東京大学のイラン・イラク調査隊が発掘したこともあるタル・イ・パークーン遺跡であり、いま一つは前3千年紀の都市遺跡として名高いタル・イ・マリヤーン遺跡である。これらの遺跡はイランの先史時代だけでなく、イラン高原とメソポタミア平原、そしてイラン高原と東のパローチスターン高原の文化交流を考える上でもきわめて重要である。

研究発表、遺跡巡検を通して、イラン人の外国人に対する強いホスピタリティに接することができた。イランを取り巻く国際情勢は日々厳しくなっているが、そこに暮らすのはきわめて穏やかで、笑顔を絶やすことのない人々であった。昨年10月に続いて2度目のイラン訪問となったが、また機会があればぜひとも訪れてみたいと思う。

2008年度 インダス・プロジェクト全体会議の報告

寺村 裕史（総合地球環境学研究所）

6月6日（金曜日）に、7・8日に開催される国際シンポジウムに先立ち、地球研インダス・プロジェクトの全体会議が開催されました。発表内容としては、物質文化研究グループとして、インド・パキスタンにおける発掘調査遺跡（予定も含む）それぞれの概要と現在までの成果、および日本隊としてGIS（地理情報システム）を用いた地形測量や写真測量の成果を、そして古環境研究グループ・生業研究グループ・伝承文化研究グループそれぞれの調査活動と今後の予定などの報告が、主な内容です。

会議はまずプロジェクトリーダーである長田俊樹教授から、本会議の趣旨説明とインダス・プロジェクトで現在動いている調査研究の簡単な状況についての話しから始まりました。その後、各発表者の報告に移りましたが、以下順を追って簡単に述べていきたいと思います。

最初の報告はP. アジートブラサードさんの「グジャラート地方における遺跡の調査」です。インダス・プロジェクトで実施している発掘調査ではありませんが、2008年度の4月～6月末までの3ヶ月間、外国人研究員として地球研に滞在されていることから、特別発表していただきました。現在アジートブラサードさんはグジャラート州のシカルプル（Shikarpur）遺跡を発掘調査されており、その調査成果について報告していただきました。シカルプル遺跡はプロジェクトで調査している



写真1 会場の様子

カーンメール (Kanmer) 遺跡とも距離が近く、両遺跡の関係なども今後の重要なポイントと考えられます。

次の報告は V. シンデさんによる「2007 年度 インド・ファルマーナー (Farmana) 遺跡の発掘調査」で、前年度までは試掘だったのですが、2007 年度は本格的に発掘調査が開始され、広範囲の住居遺構や墓から出土した人骨・副葬品など、貴重な成果が挙げられている様子を報告していただきました。

昼食後、最初の発表は J.M. ケノイヤーさんの「パキスタン・ガンウェリワラー遺跡採集の遺物」で、まだ発掘調査は始まっていないのですが、今年度発掘開始予定のガンウェリワラー (Ganweriwala) 遺跡において表面採集されている遺物についてや、遺跡のコンター図作成の様子から、現時点でのガンウェリワラー遺跡の評価と重要性について幅広く報告していただきました。

次は J.S. カラクワールさんによる「2007 年度 インド・カーンメール遺跡の発掘調査」の予定だったのですが、カラクワールさんがビザ取得等の関係上来日できなくなったため、急遽プロジェクト研究員の上杉さんが代わりに発表することになりました。カーンメール遺跡の紹介と、発掘調査における遺構検出状況や出土遺物の説明などをしていただきました。

休憩を挟んで、宇野隆夫・寺村裕史・近藤康久による「インダスプロジェクトにおける考古学 GIS」という題名で、代表として寺村が発表しました。カーンメール遺跡・ファルマーナー遺跡において実施している地形測量や写真測量など、考古学的な発掘調査以外の部分で GIS を用いておこなった調査成果についての報告でした。

次は前杵英明さんによる「古環境研究グループの調査活動」に関する報告で、コンピュータを用いた海水準変動に関するシミュレーション結果や、今後行なう予定のボーリング調査などについて報告していただきました。

次は大田正次さんによる「生業研究グループの調査活動」で、Palaeoethnobotany・Ethnobotany という二

つのアプローチを柱とした生業研究グループの目的やメンバー構成、エンマーコムギなどを対象とした具体的な調査方法についての説明がありました。

最後の報告は堂山英次郎さん、大西正幸さんによる「伝承文化研究グループの調査活動」についてでした。まず大西さんは伝承文化研究グループの中でも言語ワーキンググループの活動内容の紹介や、南アジアの言語地図の作成計画について、また堂山さんは、リグ・ヴェーダのドイツ語翻訳など、活動成果について報告されました。

以上、当日ミーティングにおいて報告された内容について、簡単ですが紹介させていただきました。いろいろな他分野の方のお話しも聞くことができ、それぞれの研究グループの方々が一体どのような調査・研究をなさっているのかということが、よくわかり有意義な会であったと思っています。

インダス・プロジェクト国際シンポジウム

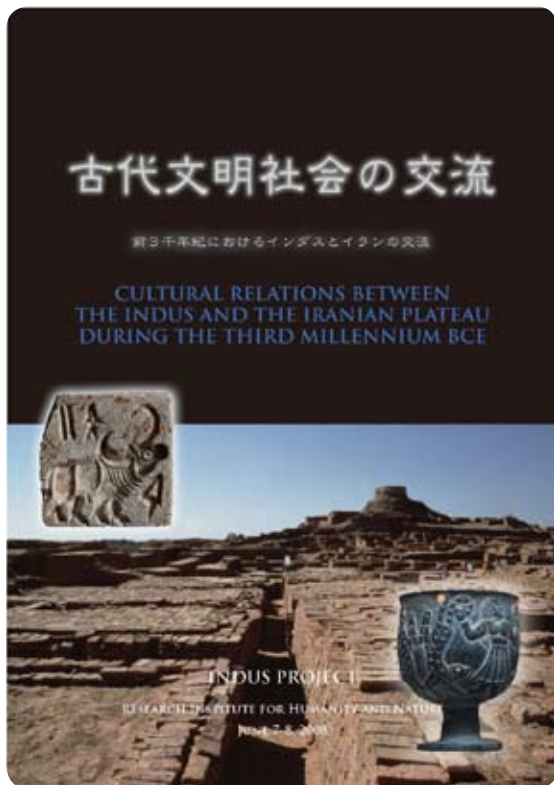
古代文明社会の交流—前3千年紀のインダスとイランの交流—
報告

上杉 彰紀 (総合地球環境学研究所)

6月7・8日にインダス・プロジェクト主催の国際シンポジウムを開催した。前3千年紀を中心とする時代のイラン高原とインダス川流域の文化交流をテーマとするもので、イラン、インド、アメリカ、ドイツ、フランス、フィンランドから一線の研究者を招いてのシンポジウムであった。

イランからはイラン国立考古学調査センターのハサン・ファーゼリ=ナシュリ氏をお招きし、イラン考古学の現状について発表していただいた。21世紀になってからイランでは外国の調査隊に対して広く門戸を開き、イラン人研究者との共同調査が旧石器時代から歴史時代に及ぶさまざまな遺跡において推進されている。そうした最新の研究動向について概括的な紹介をしていただいた。

同じくイラン出身で現在はフランスに住むユースフ・マジードザージェ氏には、2001年から実施されているジールフト遺跡の発掘調査成果について発表していただいた。この遺跡は盗掘によって広く知られるようになった遺跡であるが、6次に及ぶ発掘調査によって、宮殿跡に推定される大規模遺構 (コナール・サンダルA遺跡) と、神殿に推定される階段状遺構 (コナール・サンダルB遺跡) が明らかにされている。また、その出土遺物はイラ



ン高原とメソポタミア平原の文化交流を考える上で欠くことのできない情報源となっている。

上杉は前4千年紀から前3千年紀前半にかけてのインダス平原とパロースターン高原の関係を、イラン高原も視野に入れた上で発表した。文明社会が広大な地域に展開した地域社会の統合体であるとすれば、そうした地域統合が各地の地域社会が地域間交流によっていかに進められたのか理解する必要がある。通時的に地域社会の形成と地域間交流の発達を俯瞰することによって、インダス文明社会の形成過程を考察しようとしたものである。

インダス文字研究の大家として知られるアスコ・パルポラ氏（ヘルシンキ大学名誉教授）は、メソポタミアからイラン高原に展開した宗教図像を取り上げ、インダス文明との関係を考察した。前3千年紀前半を中心にメソポタミア平原からイラン高原には共通する宗教図像が存在することを膨大な資料をもとに論じたのち、インダス文字に含まれる人形の文字にこれら西方につながる要素が存在することを指摘した。

外国人研究者として4月から総合地球環境学研究所に滞在されているP.アジートプラサード氏（マハーラージャール・サヤジラオ大学）はグジャラート地方における初期ハラッパー文化期の遺跡・遺物の検討を通して、グジャラート地方がインダス文明社会の形成過程でその交流圏を広げていく様相について論じた。グジャラート地方にはインダス文明期以前からさまざまな地域文化伝



写真1 ハサン・ファーゼリ=ナシュリ氏



写真2 ユースフ・マジードザーデ氏



写真3 ロラン・ベゼンヴァル氏



写真4 アスコ・パルポラ氏と J.M. ケノイヤー氏

統が存在したが、前3千年紀前葉にはシンド地方やパローチスターン高原南部とも交流関係を有するようになる状況を明らかにした。

ドイツ国立考古学研究所のウテ・フランケ氏は、パローチスターン高原における文化交流について論じた。特に氏が実施したソーフル・ダンプ（ナール）遺跡の発掘調査によって、パローチスターン高原南部の先史文化編年が確立されてきたが、前4千年紀から前3千年紀にかけてパローチスターン高原のみならずイラン高原をも内包する文化交流ネットワークが形成された状況が明らかにされた。

フランス・アフガニスタン調査隊のロラン・ベゼンヴァル氏は、パローチスターン高原南部のマクラーン地方における先史文化について発表した。ミリ・カラート遺跡とシャーヒー・トゥンプ遺跡というマクラーン地方を代表する遺跡の発掘調査によって、イラン高原とインダス平原の間にあるこの地域が東西交流の上で重要な役割を果たしてきたことが明らかになりつつある。特に前4千年紀から前3千年紀初頭にはイラン高原とのつながりが強かったのに対し、前3千年紀中頃にかけて東のパローチスターン高原中央部やインダス平原との関係を強くしていくという状況は、インダス文明社会の成立過程を考える上できわめて示唆的であった。

ハラッパー遺跡の調査を指揮する J.M. ケノイヤー氏（ウィスコンシン大学マディソン校）は、ハラッパー遺跡の資料をもとに発表を行った。特に1期とされるラーヴィー文化期と2期のコート・ディジー文化期の資料に焦点を当て、遺構・遺物の点でのちのインダス文明へと継承されていく要素がすでに前4千年紀からパンジャーブ平原に存在したことを論じた。合わせて、ハラッパー遺跡に搬入される石材、銅鉱石などの諸資源の原産地推定研究についても論及し、ハラッパー遺跡の展開の背景にある地域間交流の様態についても報告した。

インダス・プロジェクトによるファルマーナー遺跡の発掘調査を指揮するヴァサント・シンデ氏（デカン大学）はインダス平原の東方に展開する地域における先史文化の展開とインダス文明の形成過程の関係について論じた。インダス文明社会の形成が東方地域をも広く巻き込みながら進行したことを指摘した。

前川和也氏（国土館大学）と森若葉氏（総合地球環境学研究所）はメソポタミアの楔形文字文書資料に登場するメルッハ、マガン、ディルムンという地域名称について一次資料の解読研究成果に基づきながら発表した。時代によってメソポタミアとこれら3つの地域の関係に変化があることを再確認し、広域地域間交流の歴史的展開

について論じた。

以上、各研究発表について瞥見してきた。インダス文明成立の歴史的背景をいかに考えるかという問題は、古くて新しい問題である。単純化すると、これまでの研究はインダス平原の外部からの影響を高く評価する説とインダス平原内部の自律的展開を強調する説に大別されるが、地域社会の形成と地域間交流の発達、そして両者の関係は文明社会という広域社会・文化的統合体の形成過程を考える上で重要であることは異論のないところである。今回のシンポジウムにおいて各地の最新の研究成果が一堂に会したことは大きな成果であった。資料をいかに読み解くかという点で研究者間の相違点も浮き彫りになる一方、各地の歴史的展開の軌跡に極めて強い一貫性があることも確認でき、今後の研究の展開にとって有意義であった。参加された方々に御礼申し上げたい。

国際ワークショップ「歴史言語学の現在」

大西 正幸（総合地球環境学研究所）

言語 WG は、6月20日に、3人の歴史言語学の専門家をお招きして、「歴史言語学の現在」と題するワークショップを開催しました。当日は、雨にもかかわらず、研究者や大学院生など、30人以上の聴衆が集まり、熱気に充ちたものとなりました。

ワークショップは、まず、オーストロアジア語族の東言語グループ、モン・クメール諸語の権威であるジェラルド・ディーフロス教授による、「オーストロアジア語族の故地について」という発表で口火が切られました。いくつかの動植物語彙を手懸かりにオーストロアジア語族の故地を推定する、興味深い内容でした。オーストロアジア語族の西言語グループとしては、長田俊樹教授が専門とするインドのムンダ諸語が存在しますが、その起源地については、インダス説をはじめ諸説あり、決着をみていません。今回の議論は、この問題にも直接関連するもので、今後の研究の進展が期待されます。

ディーフロス教授に続いて、オーストラリア国立大学のニコラス・エヴァンス教授は、「現存の言語から古代文字を読み解く」という題で、文字解読のこれまでの歴史と、その方法論をめぐる、広い視野に立った議論を展開されました。この発表も私たちのプロジェクトに直接関連するもので、インダス文字や、近年イランで発見された新しい文字の解読へのアプローチの仕方にも示唆



写真1 会場の様子



写真2 ジェラルド・ティーフロス教授

を与える内容でした。(今回の内容を含むエヴァンス教授の著書が、今年末にイギリスから出版されます。私たち言語 WG は、エヴァンス教授の全面的な協力のもと、その日本語版の出版を行なう予定です。)

最後に、ハワイ大学のアレクサンダー・ヴォヴィン教授が、地名の実地調査や万葉集東方言の文献資料をもとに、アイヌ民族が上代には本州の中南部にも広汎に居住していた、との仮説を提出されました。話者集団の痕跡を地名に求める方法については、インダス文明に関連しても、西インドやパキスタンの地名を手懸かりに基層言語の痕跡を探る、ヴィッツェル教授の試みがあります。ヴォヴィン教授の発表は、歴史言語学の重要な部分を占める地名研究にも、実地調査に基づく跡づけが重要であることを、改めて指摘してくれた点など、私たちも学ぶところの多いものでした。

いずれも刺激的な発表で、発表のあと、発表者同士や、会場の参加者との間に、長時間にわたる質疑や議論が展開されました。

なお、私たち言語 WG は、今回のワークショップを、将来、歴史言語学者と考古学者の共同による国際シンポ

ジウムを開催するための、予備的なものと位置づけています。今後の展開にご期待ください。

ピーター・ベルウッド著（長田俊樹・佐藤洋一郎監訳）
『農耕起源の人類史』の紹介

森 若葉（総合地球環境学研究所）

総合地球環境学研究所（以下、地球研）では、長田俊樹教授と佐藤洋一郎教授の監訳のもと、ピーター・ベルウッド（Peter Bellwood）氏によるの "First Farmers" (Blackwell, 2005) を訳しました。翻訳は、地球研のメンバーを中心とするグループで行われ、『農耕起源の人類史』として6月下旬に京都大学学術出版会から出版されました。6月20日には、出版を記念し、著者のベルウッド教授を招いての講演会ならびにパーティーが京都大学の芝蘭会館で開かれました。

ベルウッド氏は、オーストラリア国立大学教授で、主にオセアニアから東南アジアをフィールドとする考古学者です。数多くの著作が知られ、日本においては、『ポリネシア』（池野茂訳、大明堂、1985年）と『太平洋：東南アジアとオセアニアの人類史』（植木武・服部研二訳、法政大学出版局、1989年）がすでに翻訳されています。

本書は、農耕社会がどこでいつどのように生じ、どの方向に拡散していったのかを、農耕言語拡散仮説の立場から扱ったものです。この仮説は、主たる農耕の起源とその拡散が、主要な語族の起源および拡散にかさなるというものです。農耕・牧畜を行う人間集団が移動するにつれ、その農耕文化とともに、彼らが話す言語が、拡散していき、それによって現在の語族が形成されるにいったと考えます。本書では、考古学、農学、人類学、言語学、遺伝学といった異なる分野からの膨大な文献とデータをもとに、この仮説が提示されています。この本の新しい点は、すでにいくつかの地域で個別に提示されていた同様の仮説を、世界全域に適用した点にあります。語族規模で言語が拡散するためには集団移動が不可欠であって、まとまった数の人間が移動することなく言語だけがひろがることはない、彼は考えます。この本によると、このような農耕と言語の拡散の一致は、中東や中国、西アフリカ、ニューギニア高地、メソアメリカ、そしてさらには日本においても確認されます。

実際の翻訳作業自体はかなり難航しました。企画段階の2005年から4年あまり、出版は当初の予定よりかなりずれこみました。これは、どの章にも様々な分野の



専門用語が数多く使われていること、世界中の考古遺跡名、言語名、民族名など、あまり知られていない固有名詞が数多くあらわれること、また、英文に凝った言い回しが多く使われていることなどの理由によります。さらには、それぞれ専門を異にする11人で翻訳を担当したため、集まって議論する機会がなかなかもてず、その結果、多岐にわたる分野の用語統一にたいへん苦勞することにもなりました。

しかしながら、学際的かつ世界各地の多様なデータを駆使した本書の翻訳は、いろんなバックグラウンドの人材が集う地球研ならではの作業であったといえます。先史時代から近現代にいたるタイムスパン、そして全球的規模という壮大なスケールの仮説が、本書をとっても魅力的なものにしています。このような本を著したベルウッドにはただ感嘆するばかりです。機会がございましたら、ご一読いただければ幸いです。

各章のタイトルおよび翻訳担当者は以下の通りです。

- 序および第1章 初期農耕拡散仮説の展望
長田俊樹（地球研・教授、監訳者）
- 第2章 問題提起-農耕の起源と拡散
内山純蔵（地球研・准教授）
- 第3章 西南アジアにおける農耕の起源
丹野研一（地球研・プロジェクト上級研究員）
- 第4章 肥沃な三日月地帯をこえて-ヨーロッパとアジアにおける農耕拡散をたどる
有村 誠（前地球研・プロジェクト研究員、
現東京文化財研究所研究員）
- 第5章 アフリカの農耕-もう一つの起源
梅津千恵子（地球研・准教授）

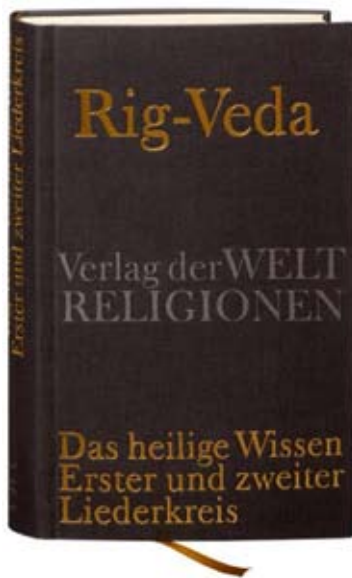
- 第6章 東アジアにおける農耕の起源
村上由美子（地球研・プロジェクト研究員）
- 第7章 東南アジア、オセアニアへの農耕の拡散
秋道智彌（地球研・教授）
- 第8章 アメリカ大陸における初期農耕
福永健二（前地球研・プロジェクト上級研究員、
現広島県立大学准教授）
- 第9章 語族は人類の先史に対してどのような意味をもつか
- 第10章 農耕の拡散-考古学と言語学の比較から
森 若葉（地球研・プロジェクト上級研究員）
- 第11章 遺伝子、古人骨、人々の身体特徴からさぐる
片山一道（京都大学大学院理学研究科教授）
- 第12章 初期農耕拡散の特徴
佐藤洋一郎（地球研・教授、監訳者）

『リグヴェーダ』ドイツ語新訳の紹介

堂山 英次郎（大阪大学）

伝承文化研究グループ・インド学班は、各人の専門領域を活かし、深化させながら、プロジェクトへの寄与に努めている。特に強調すべき成果としては『リグヴェーダ』の翻訳が挙げられる。『リグヴェーダ』(以下、RV)は、前1200年頃にインダス川上流域で編纂されたと考えられる神々への讃歌集である。まとまった量の文献としては印欧語最古の資料であり、印欧語比較言語学の誕生・発展を支えてきたばかりでなく、インドイラン語共通時代、初期のインドアーリア語文化の情報を伝える貴重な情報源でもある。「インダス文字」が解読されていない現状では、時代・場所ともにインダス文明の最も近くに位置する外部文献資料として特別な重要性を有する。

2006年からは、本プロジェクトメンバーである後藤敏文（東北大）、堂山英次郎（大阪大）の他、各種シンポジウムや講演会等にて実質上プロジェクトに貢献を続けてくれているM. ヴィッツェル（ハーヴァード大）、そしてM. イェジチ（ザグレブ大）の4人によるRVのドイツ語全訳プロジェクトが始まり、ドイツのVerlag der Weltreligionen（世界諸宗教出版）の原典訳シリーズから4分冊で出版されることになった。2007年9月には第1巻が*Rig-Veda: Das heilige Wissen* (2007 Frankfurt/Leipzig, 889頁。RV第1, 2巻を収録)として、シリーズ第一陣を飾って出版され、学界やマスコ



ドイツ語新訳 Rig-Veda 第1巻表紙



訳者3人（着席）と編集責任者 Simm 氏（右端）及び編集協力者 Gräfe 氏（後列）。2007年10月インゼル、ズーアカムプ社（フランクフルト）の編集室にて

ミからも大きな反響が寄せられている。RVの全訳は、K. ゲルトナー（Geldner）が手がけて以来事実上80年ぶりの大事業であり、その間になされた学術的進歩を考えると、新訳の出版が持つ意味は甚大であり、各方面から今後インド学のスタンダードワークとしての役割を期待されている。

新たな水準のRVが訳し直され、古代インドの地理、社会、生活等についてより正確な情報が提供されれば、インダス文明の理解にとっても新たな知見と視座が得られるものと予想される。サラスヴァティー川を巡る讃歌、言及、アーリヤの人々の東方への進出、遊牧、栽培の実態などについて、具体的な研究も進めている。これらを基に、南インド、現在各地のフィールドを専門とするメンバーと、さらに知見の摺り合わせを行い、成果に結実させたい。

編集後記

早くも2008年も夏を迎える頃となりましたが、いかがお過ごしでしょうか。6月には全体会議と国際シンポジウムが開催され、プロジェクトの活動も着実に進んでまいりました。

年末にはプロジェクトの中間報告が控えています。各研究グループの調査・研究成果をプロジェクトの目的に沿ってまとめ上げていくという大きな仕事となりますが、このニュースレターを各研究グループの進捗状況や調査・研究の中で得た発想などの発表の場としてご活用くだされば幸いに存じます。

最後になりましたが、今号にご寄稿くださった方々に篤く御礼申し上げます。（上杉）



イラン、シーラーズのヘンダヴァーネ（スイカ）

インダスプロジェクト ニュースレター 第4号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹
編集・発行 インダス・プロジェクト
発行日 2008年7月31日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山457-4
大学教利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所
URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>